

# キリスト

— その生涯と  
弟子たち —







# 岩波写真文庫 282 キリスト —その生涯と弟子たち—

編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所  
監修 澤柳大五郎

聖書はこれまで世界中で最も多く読まれ、これからもまた読まれるであろう本である。とはいえ一般の人にとって聖書は必ずしも読み易い本ではない。若し聖書が多く美しい挿絵で飾られていたら、それは一層親しみ易いものとなる。本書は二千年の基督教美術の中から選ばれた傑作によって、基督の生涯と事蹟とを示し、併せて十二使徒や福音記者、更に主なる聖人、聖女のタイプも添えた。この本は既刊「聖母マリア」と相俟って、聖書の美しい良き伴侶となろう。

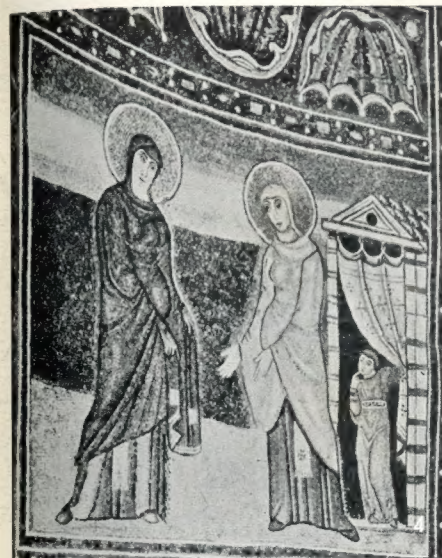
基督教美術の大部分は公教（カトリック）に従っている。で引用は公教会の聖書に拠ったが、勿論新教のものも大差があるわけではない。著しく違ふ点は固有名詞の綴りであるから、初出の箇所にルビで新教聖書の読み方を注して置いた。

## 目次

基督絵伝……表紙裏～43	基督像の展開……44～49	聖父、天使……50
降誕……2	初期……44	十二使徒……52
少年期……4	ビュザンティウム……45	福音記者、宣教者……54
公生活……10	ロマネスク……46	聖人……56
受難……24	ゴシック……47	聖女……58
復活……36	ルネサンス……48	旧約……60
昇天……40	十七世紀以降……49	基督の祖先……62
公審判……42	附……50～64	索引……裏表紙裏

作品のネイムは《題名》、作者又は所在、年代（ローマ数字は世紀、ca. は約…年頃の意）の順に記す。

定価100円 1958年11月25日発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1  
半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店



2 《ヨセフとマリアの婚約》 ラファエロ 1504. 3 《聖告》 シャルトル大聖堂絵ガラス XIII. 4 《御訪問》 バレンツォ大聖堂モザイク ca. 550. 5 《聖告》 ラ マルトラーナ聖堂モザイク ca. 1150.

童貞マリアはガリラヤのナザレトの町の大工ヨセフの許婚であった。未だヨセフと同居しない或日、天使ガブリエルが現れて恩寵に依って子を生むであろう、その名をイエズスと名付けよと告げた。その言葉の如くマリアは孕った。ヨセフは義しい人だったので秘かに離別しようとした。その時天使が夢に現れ、ダヴィドの子ヨセフよ、マリアを納れるのを怖れるな、彼女の孕ったのは聖霊の業であると告げた。マリアが従姉エリザベトを訪問したとき彼女の子（洗者ヨハネ）は胎内で躍った（マテオ一ノ一八—二五、ルカーノ二六—五六）。





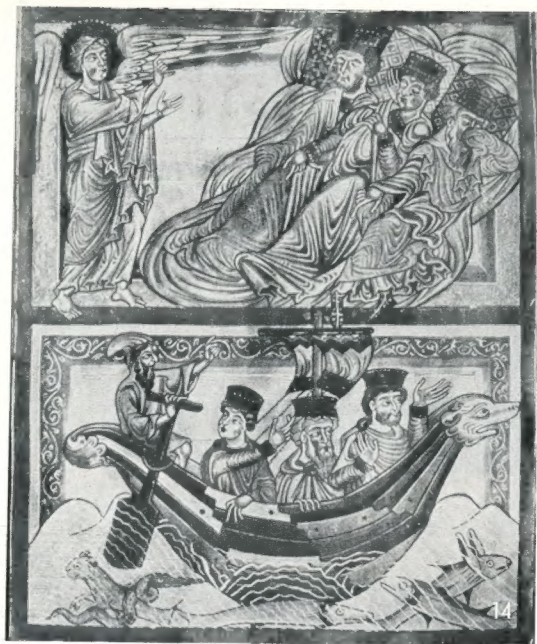


6 《御降誕》 イギリス手写本挿絵 ca. 1250. 7 《御降誕と牧者へのお告げ》 ラ マルトラーナ  
聖堂モザイク ca. 1150. 8 《同上》 ジョットー派 XIV. 9 《お告げ・御降誕・牧者へのお告げ》  
ジョヴァンニ ビザーノ ca. 1301. 10 《洗者ヨハネの誕生》 ロシアのイコン 1450~1500.



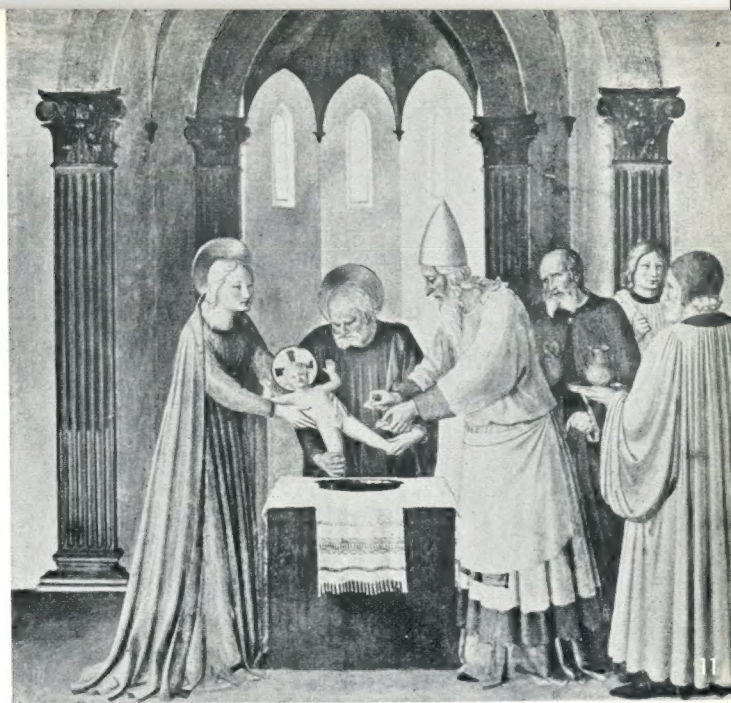
皇帝アウグストゥスから戸籍調べの詔が出たのでダヴィドの  
裔のヨセフは故郷のベトレヘムに帰った。そこでマリアは男  
の子を産んだ。宿に室が無かったので厩の馬槽に赤児を寝か  
せた。その夜近くに羊の群を守っていた牧者の許に天使が現  
れ「今日ダヴィドの町に汝等の救主、主<sup>キリスト</sup>が生まれた。布に  
包まれ馬槽に置かれた嬰兒がそれだ」と告げた。牧者等は急  
ぎ行って聖子を礼拝した(ルカ二・一二〇)。是より先エリ  
ザベトにはヨハネが生れた(ルカ一・五七・五八)。





13

11 《割礼》 アン  
ジュリコ XV.  
12 《奉献》 R.  
v. d. ウァイデン  
ca. 1460. 13  
《東方博士の礼  
拜》 象牙浮彫  
XIII. 14 《東  
方博士の夢と帰  
郷》 ドイツ手  
写本挿絵 ca.  
1197. 15 《東  
方博士の礼拜》  
レオナルド ca.  
1482.



15

すべき君が生れるという予言があったので、ヘロデ王はこれ  
を聞いて大いに悩み、秘かに博士等を招いて星の現れた時刻  
を聞き糺し、「行って幼児を尋ね、詳しくその様子を告げよ」と  
命じた。星の先導に依って聖子を見出した博士等は礼拝し  
て黄金、乳香、没薬の礼物を捧げた。そして夢にヘロデ王の  
許に帰るなどのお告げを受けたので、別の道をとって自分た  
ちの国に帰った(マテオ二ノ一二)。

「幼児に割礼を施すべき八日が満ちたので、未だ胎内に宿ら  
ない先に天使が云ったとおりその名をイエズスと名付けた」  
(ルカ二ノ一二)。聖母の潔めが済むと、モイゼの律法に従っ  
て幼児の宮参りにイエルサレムに上った。そこにシメオンと  
いう敬虔な義人があってイスラエルの慰め(救済)を待ち望ん  
でいた。彼は聖霊により恰も同じ時神殿に導かれ、幼児イエ  
ズを抱いて神を讃美して云った、「主よ、今こそ御身の僕  
を安らかに逝かせ給え、我が目は主の救いを見ましたから」。  
また両親を祝して母マリアに向って、「見よ、この子はイス  
ラエルの多くの人が、或は倒れ、或は起つために、また反逆  
の徴のために置かれた。あなたの心も剣で貫かれるであらう  
……」と救霊と受難とを予言した(ルカ二ノ一二—三五)。  
イエズスが生れた時徴の星の導きにより東方の博士達がイェ  
ルサレムに来て「生れ給うたユダヤ人の王は何処に在るか」  
と尋ねた。かねてユダヤのベトレヘムにイスラエルの民を牧



12





19



20



21

博士達が去って後、ヨセフの夢に天使が現れ「起きて幼児とその母を連れてエジプトに逃れ、私が汝に告げるまでかの地に留まれ」と教えた。ヨセフは起きて夜のうちに幼児とその母を連れて逃れ、ヘロデの死までエジプトに留まった(マテオ二ノ一三一―一五)。

ヘロデは博士等に計られたと知って大いに怒り、ベトレヘム周辺の二歳以下の男の子を悉く殺させた。天使のお告げに依ってヘロデの死を知ったヨセフは聖母子を伴ってエジプトより帰り、ガリラヤのナザレトの町に移り住んだ(マテオ二ノ一六―一三三)。幼児は次第に成長して健かに賢く育った(ルカ二ノ四〇)。イエズスが十二歳の過越祭にイエルサレムに詣でた帰りみち両親は我が子の居ないのに気付き、探し尋ねるとイエズスは聖殿で学者達の間に坐り、その賢さは人を驚かせていた。聖母が心配して探した由を云うと「私が私の父の家に居なければならぬのを御存じないのですか」と答えた(ルカ二ノ四一―五二)。



17



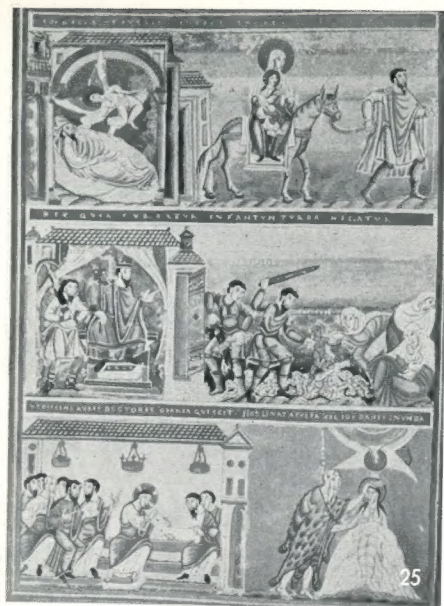
18

16 《エジプト避難》 パラティナ礼拝堂モザイク ca.1150. 17 《避難途上の憩》 レンブラント XVII. 18 《幼児虐殺》 ライヒェナウ派手写本挿絵 X. 19 《聖母子》 ビントリッキオ派 XV. 20 《聖ヨセフと少年イエズス》 G.d.ラトゥール XVII. 21 《聖殿内のイエズス》 アンジェリコ XV.



18

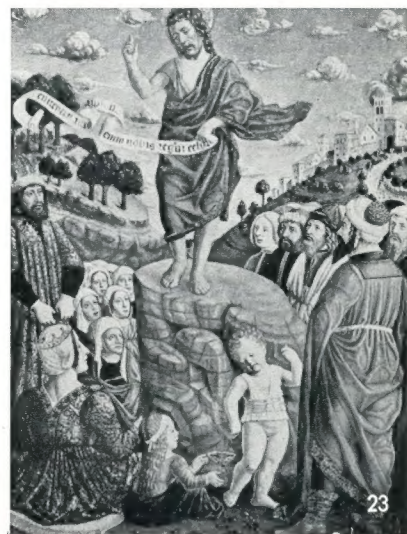




22 《受洗》 デンマルク女王インゲボルクの詩篇挿絵 XIII. 23 《ヨハネの宣教》 B.ペンボ XV. 24 《試み》 ギベルティ 1403~24. 25 《ヨセフの夢より受洗まで》 エヒテルナハ福音抄挿絵 ca.1025. 26 《試み》 聖マルコ聖堂モザイク XIII.



其頃洗者ヨハネは駱駝の毛衣を纏い蝗と野蜜を食し、荒野で「悔い改めよ、天国は近づいた」と宣教し、ヨルダン河で多くの人に洗礼を施していた(マテオ三ノ一一二、マルコ一ノ一八、ルカ三ノ一八)。イエズスはナザレトからヨルダンに来てヨハネから洗礼を受けた。そのとき天開け、聖霊が鳩の如き形してその上に留まり、天から声があつて「汝は我が愛子、我は汝に依りて喜ぶ」と(マテオ三ノ一三七、マルコ一ノ九一一、ルカ三ノ二二・二二)。次いでイエズスは聖霊に導かれて荒野に赴き、四十日四十夜断食した。そこに悪魔が現れ様々な難問でイエズスを試みた。イエズスは試練に克った(マテオ四ノ一、マルコ一ノ一二一三、ルカ四ノ一三)。基督は先ずガリラヤで宣教を始め、ここにその公生活に入った。







27 《ペトロとアンドレアの召命》ドゥッチオ XIV. 28 《マテオの召命》(レヴィの饗宴)カラヴァッジオ XVII. 29 《ヤコボとヨハネの召命》バサイティ 1510. 30 《サマリアの女》石棺浮彫 IV. 31 《カナの婚宴》アントウェルペンの画家 ca.1525~50. 32 《サマリアの女》ヴィンチェンツォ カテナ XVI.

ガリレアのカナに於て婚礼があった時、イエズスも母や弟子達と共に招かれた。この宴会で葡萄酒の尽きた時、水を葡萄酒に変えたのが基督の奇蹟の最初であった(ヨハネ二ノ一一)。

ユダヤを去ってガリレアに往くべくサマリアの町を過ぎた時イエズスはヤコブの泉と呼ばれる井戸で休み、そこへ水を汲みに来たサマリアの女に水を求めた。ユダヤ人はサマリア人と交際しない習性だったので女は「貴方はユダヤ人なのにどうしてサマリア女のわたくしに飲ませよとおっしゃるのですか」と問うた。これより基督とサマリア女との間に交される会話は聖書の中でも最も美しい話の一つである。イエズスはここに二日留った(ヨハネ四ノ一四三)。



ガリレアの湖畔でシモン(ペトロ)とその兄弟アンドレアが網を打っているのを見てイエズスは「私に従え、私は汝等を人を漁るものにしよう」と呼びかけた。二人は直ちに網をすてて随った。更に進んでゼベデオの子ヤコボとその兄弟ヨハネが父と共に網を繕っているのを見て呼ぶと彼等も船と父をおいて従った(マテオ四ノ一八一二、マルコ一ノ一六一二〇、ルカ五ノ一、奇蹟の漁獵参照)。

マテオ(レヴィ)の召命はレヴィの饗宴の絵で表される(マテオ九ノ九一三、マルコ二ノ一四一七、ルカ五ノ二七三九)。





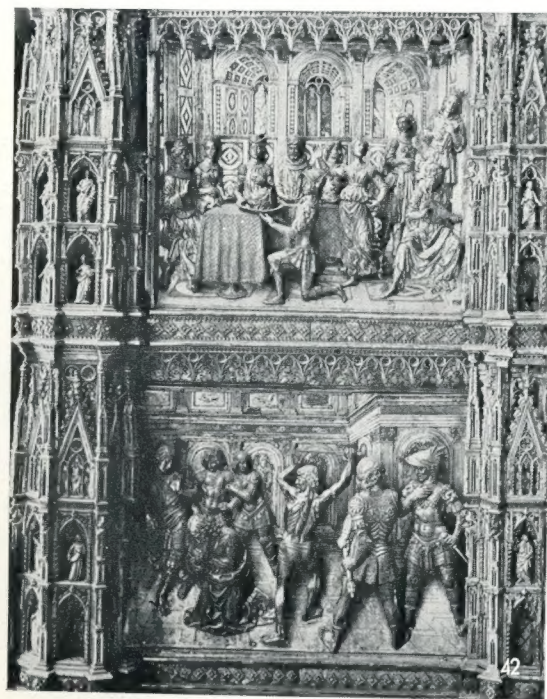
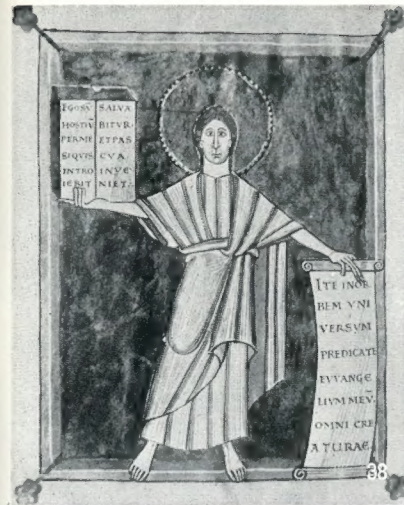
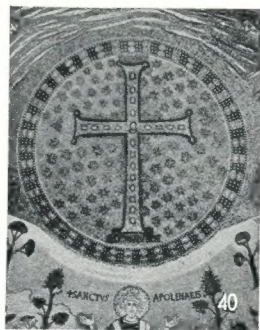


33 《奇蹟の漁獲》(初弟子召命) ラファエロ 1515  
/16. 34 《湖上の嵐》 ケルン派福音抄挿絵 1000  
~1025. 35 《水上を歩む》 ジョットー(模) XIV.  
36 《病者を癒す》 レンブラント 1642~45.

基督とその弟子達がガリラヤの湖を渡る時突然嵐が起って船は今にも沈みそうになったが彼は眠っていた。弟子達がよび起すと海に向って「鎮まれ」と命じた。忽ち嵐は治った(マテオ八ノ二三一二七、マルコ四ノ三五四一、ルカ八ノ二二一二五)。また或時弟子達を先に船に乗せて発たせ、後から水の上を歩いて行った。ペトロがこれに倣おうとしたが怖れのために沈みかけた。船からあがると人々はすぐ彼を認め病人を牀の儘運んで来、衣の裾にでも触れさせようとした。触れた者は悉く癒された(マテオ一四ノ一二一三六、マルコ六ノ四七一五六、ヨハネ六ノ一六一二一)。







基督は十二使徒を選び各地に派遣した(マテオ一〇ノ一四二、マルコ三ノ一三—一九・六ノ七一三、ルカ六ノ一二—一六・九ノ一六)。基督はカイザリア地方で弟子達に語り、シモンを選んで「汝は磐なり。我この磐の上に我が教会を建てん」と云って天国の鍵を渡した(マテオ一六ノ一三—二〇)。その後基督はペトロ、ヤコボ、ヨハネを伴い高い山に上った。突如貌は変わり衣は白く輝いてエリヤとモイゼが両側に立っていた。弟子達が畏れ伏し顔を上げた時には主の他に誰もいなかった(マテオ一七ノ一—九、マルコ九ノ一—九、ルカ九ノ二八—三六)。その頃ヨハネは斬首された(マテオ一四ノ一—一二、マルコ六ノ一四—二九)。

37 38 《使徒派遣》 ケルン派福音抄挿絵 1070~80. 39 《ペトロに鍵を渡す》 ベルギーノ 1480.  
40 《御変容》 聖アポリナレ イン クラッセ聖堂モザイク ca.550. 41 《御変容》 パラティ  
ナ礼拝堂モザイク ca.1150. 42 《洗者ヨハネの殉教》(サロメの踊り) ヴェロッキオ 1477~80.







46 《ラザロの復活》チチェスター聖堂浮彫 1125～50. 47 《跛者を癒す》ライン派手写本挿絵 XII～XIII, 48 《イエリコの盲人を癒す》ブサン 1650.



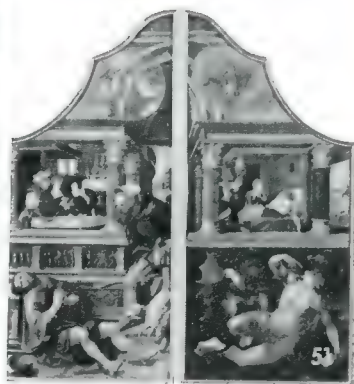
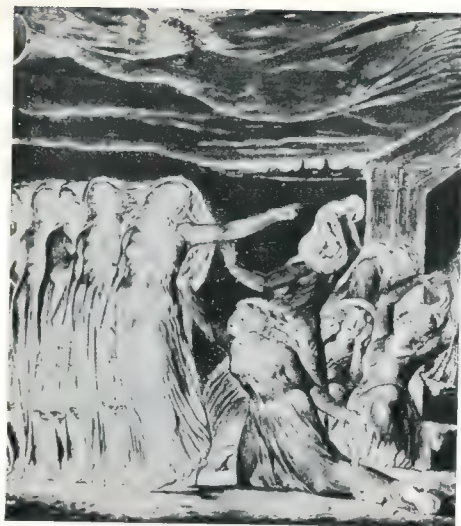
43 《パンの奇蹟》ムリリョ XVII, 44 《悪魔を逐出す》ライヒェナウ派福音抄挿絵 ca.1000. 45 《パンの奇蹟》聖アポリナレ ノオヴァ聖堂モザイク 500～525.



基督の行った数々の奇蹟の中から民衆のためにパンと魚を増す話(マテオ一四ノ一五―二一及び一五ノ二九―三九、マルコ六ノ三五―四四及び八ノ一〇、ルカ九ノ二一―二七、ヨハネ六ノ五一―五三)、悪魔憑から悪魔を追出す話(マテオ八ノ二八―三四、マルコ五ノ一―二、ルカ八ノ二六―三九)、イエリコの盲人を癒す話(マテオ二〇ノ二九―三四、マルコ一〇ノ四六―五二、ルカ一八ノ三三―四三)、跛、盲、啞等を癒す話(マテオ一五ノ二九―三二)、ラザロの復活(ヨハネ一一ノ一―四四)をここに集めた。







ここには基督の教訓の中から幾つかの寓話を選んだ。人々を羊に、自らをそのために命を捧げる善き牧者に比したところから基督を牧者の姿で表すことは早くから行われた(ヨハネ一〇ノ一二)。蕩児の帰郷の感銘深い説話は文学に美術にしばしば描かれる(ルカ一五ノ一一—一二)。十人の乙女の譬はマテオが伝え(二五ノ一一—一二)、富豪と貧しいラザロの挿話はルカ一六ノ一九—二一にある。善きサマリア人の物語(ルカ一〇ノ二五—三三)はシラーが「美しい魂」の巻と、レンブラントは深い愛を籠めてくりかえしこれを描いている。

49 《善き牧者》 ガラ プラキディア廟モザイク ca.440. 50 《蕩児の物語》 ドイツ毛氈 1400~30. 51 《貧しいラザロと富豪の死》 B.v.オルレイ XVI. 52 《十人の乙女》ブレイク 1822. 53 《善きサマリア人》 レンブラント 1648.







54 《神殿への貢税》 マサッチオ 1426/7. 55 《イエルサレム入城》 ロシアのイコン XVI. 56 《宮潔め》 ギベルティ 1403~24. 57 《イエルサレムの滅亡を歎く》 ライヒェナウ派福音抄挿絵 ca.1000. 58 《宮潔め》 グレコ ca.1695~1700.



カペアルナウムに來た時、收税吏の要求するままにイエスはベトロに命じて魚の口から貨幣を取り出して納めさせた(マテオ二七ノ二四―二七)。イエルサレムに近づくと主は驢馬に乗って都に入つた。多くの人々は主を讃美し道に木の枝や服を敷いて迎えた(マテオ二二ノ一九、マルコー一ノ一〇、ルカー九ノ二八―三八、ヨハネ二二ノ二一―二八)。然しイエズはこの町の滅亡を予見して哭いた。直ちに聖殿に入り、祈りの家を盗賊の巢にした商人を逐い出し、以来日々聖殿で民に教えた。(マテオ二二ノ二一―二七、マルコー一ノ一五―一八、ルカー九ノ四一―四六)。





59 《罪女の改心》 ジョットー派 XIV. 60 《姦淫の女》 女王インゲボルクの詩篇挿絵 XIII. 61  
《カエサルのもの》 ティツィアーノ ca.1518. 62 《ベタニアのシモンの家》 N. フロマン 1461.  
63 《マリアとマルタ》 フェルメール 1654/5. 64 《ユダの裏切》 ジョットー 1304~06.



女は多く愛したが故に許された」といった。(ルカ七ノ三六―五〇)。ベタニアのシモンの家で一人の女が高価なナルドの香油を持って来て主の頭に注いだ。人々がその無駄を責めると主は「私に香油を注いだのは私の葬りの備えをしたのだ。福音の宣べられる所ではこの女の行爲はいつまでも語られるであらう」と云った(マテオ二六ノ六―一三、マルコ一四ノ三―九、ヨハネ一ノ一―一八)。この女はラザロとマルタの姉妹マリヤであつた。曾てイエズスが二人の家に居た時マルタは忙しく働きマリヤはただ足許に坐して主の言葉を聞いていた(ルカ一〇ノ三八―四二)。「基督」とは「香油を塗られた者」の意である。

「**パ**フリサイ人が異にかけようとして「皇帝に税を納めるべきか否か」と問うたのにイエズスは「カエサルのもものはカエサルに、神のもものは神に返せ」と答えた（マタイ二二ノ一五—二二、マルコ二ノ一三—一七、ルカ二〇ノ二〇—二六）。或る日イエズスが神殿にいる時人々が姦淫の罪を犯した女を連れてきて「モイゼの律法には石殺しにせよとありますが」と云ってイエズスを陥れようとした。イエズスは「汝等のうち罪なき者先ずこの女を打て」と云って彼等を去らせた（ヨハネ八ノ一—一〇）。或るフリサイ人の家でイエズスが食卓についた時罪女と噂される女が涙で主の足をぬらし髪で拭い、又足に接吻して香油を塗った。フリサイ人が怪しむのをみてイエズスは「この







65 《聖晩餐》 聖ベニーニュ僧院破風浮彫 XII. 66  
《聖晩餐・弟子の足を洗う》 女王インゲボルクの詩  
篇挿絵 XIII. 67 《ゲツセマニの祈り》(アゴニー)  
女王インゲボルクの詩篇挿絵 68 《ゲツセマニの  
祈り》 フランス彩色木版 ca.1400.



65



イエスはオリヴの山の麓のゲツセマニに行き弟子達を待たせペトロ、ヤコ  
ボ、ヨハネの三人を連れて行き、父なる神に向い「若し出来ればこの盃をとり  
給え、されど我意の儘には非ず、思召の如くなれ」と痛切な祈りを捧げた。  
そして主の戒めにも拘らず三たび弟子たちが眠っているのを見て更に悲しみを  
深くした。死ぬばかりの愁いに滴る汗は血の半の如くであつた(マテオ二六ノ  
三六―四六、マルコ一四ノ三二―四二、ルカ二二ノ三九―四六)。

過越の無酵麴の祭にイエスは十二使徒と聖餐を共にした。既にユダの裏切り  
(マテオ二六ノ一四―一六、マルコ一四ノ一〇―一二、ルカ二二ノ三二―三六)を知  
り、受難の時の近いのを知って、自ら弟子達の足を洗ってから食卓につき、こ  
の中に裏切者のあることを告げ、パンを祝して頒ち与え「これ我が身体なり」  
と云い、又盃を廻して「これは多くの人のために流される契約の血である。私  
は神の国の来るまで、今より後葡萄の果を飲まないであろう。人の子は定めら  
れた如く逝く」と告げた。この時イエスの最も愛した弟子ヨハネは主の胸に  
寄りそっていた(マテオ二六ノ二〇―二九、マルコ一四ノ一七―二五、ルカ二  
二ノ七―二三、ヨハネ一三ノ一―三〇)。弟子達は主の言葉を解せなかった。



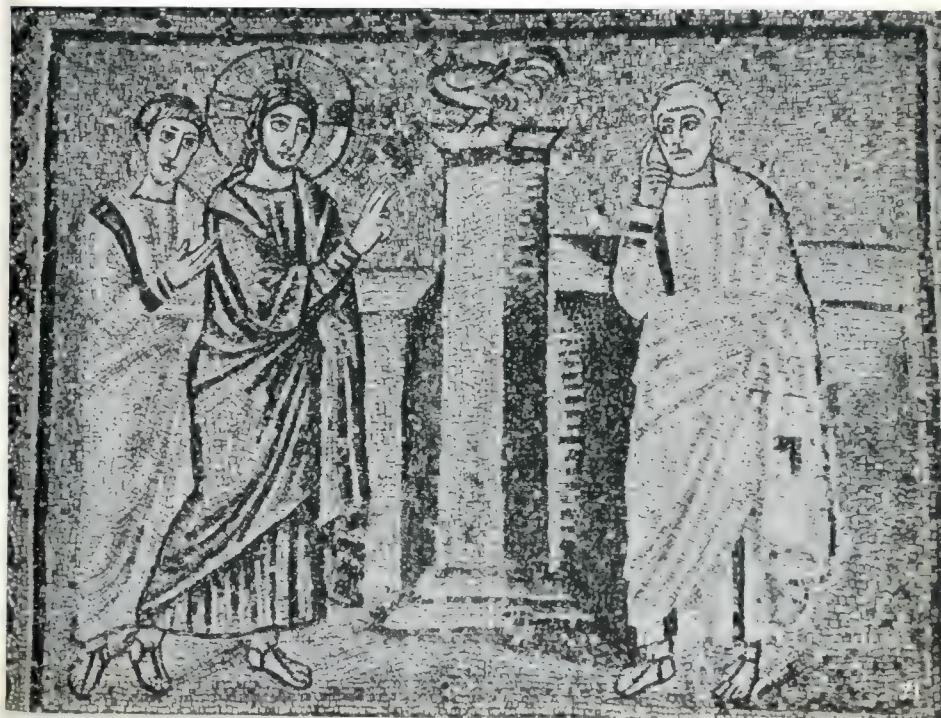




69 《就縛》 パルナ ダ シエナ  
ca.1350~70. 70 《ユダの接吻》  
聖アポリナール ノヴァ・聖堂モ  
ザイク 500~525. 71 《ペトロ  
の預言の予言》 同前. 72 《ペト  
ロの否み》 ドウッチオ 1308~  
11. 73 《ヘロデの前》 デューラ  
- XVI.



そのうちに主を売ったユダが司祭長から与えられた兵卒や群衆をつれて近づいて来た。かねて私が接吻するのが彼であると謀し合せてあったのでユダが近づいて接吻するのを合図に人々はイエズスを捕え、傍らにいたペトロは一人の下僕(マルクス)の耳を斬り落した。弟子達はかねてイエズスの予言した(マテオ二六ノ三〇—三五、マルコ一四ノ二七—三一)如く主を棄てて逃げた。鶏の鳴く前に三度主を否んだペトロは御言葉を思い出して劇しく哭いた(マテオ二六ノ四七—七五、マルコ一四ノ四三—七二、ルカ二二ノ四七—六二、ヨハネ一八ノ三—二七)。かくてイエズスは捕えられ総督ピラトの許に送られ、次いでヘロデに送られたが、またピラトに還された(ルカ二三ノ六—一一)。一方主を売ったユダは主の死刑の宣告を聞いて悔悛し、自ら縊れて死んだ(マテオ二七ノ三—八)。







74 《鞭打》ギベルティ 1403  
~24. 75 《嘲弄》ジョット  
ー 1304~06. 76 《茨の冠》  
フランス彫刻 XVI. 77 《エ  
クケ ホモ》 フランス木彫  
XV. 78 《同上》 ビエール  
ド ビュリの墓 XV. 79  
《ピラト手を洗う》 ザクセン  
派ミサ典書挿絵 1225~50.



ピラトはイエズスの無実を信じたが司祭等と民衆に押さ  
れて基督に死刑を宣せざるを得なかった。基督は笞打た  
れ、辱められ、茨の冠を被せられ(マテオ二七ノ二六―  
三〇、マルコ一五ノ一五―一九、ルカ二二ノ六三―六五、  
ヨハネ一九ノ一―三)群衆の前に引出された。エクケホ  
モ(看よ、この人なり)はこの時のピラトの言葉である  
(ヨハネ一九ノ四―六)。ピラトは群衆の前で手を洗い己  
に責任の無い証とした(マテオ二七ノ二四・二五)。







80XIII



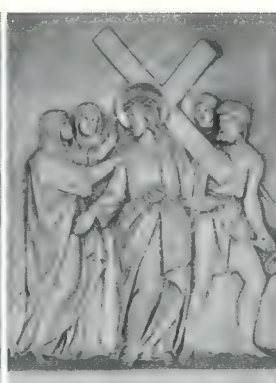
80XI



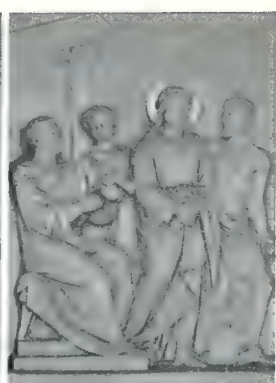
80X



80VII



80IV



80I



80XIV



80XII

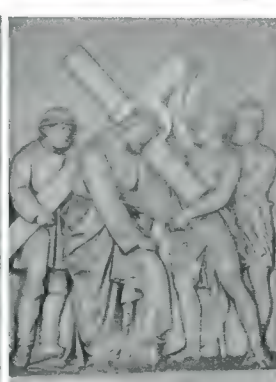


80 《十字架の道行—十四留》  
 I 《死刑宣告》 II 《十字架を負う》 III 《ひとたび置く》  
 IV 《聖母に逢う》 V 《シモンに援けらる》 VI 《ヴェロニカ御顔を拭う》 VII 《ふたたび置く》 VIII 《婦人等を慰む》 IX 《三たび置く》 X 《衣を剥がる》 XI 《釘付けらる》 XII 《十字架上に息絶ゆ》 XIII 《十字架より降さる》 XIV 《墓に葬らる》

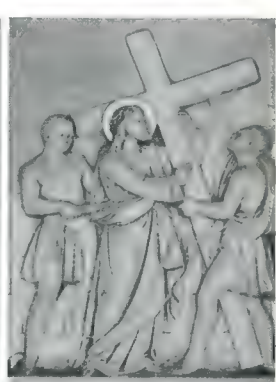
81 《十字架の道行》 マティス 1952.



80VIII



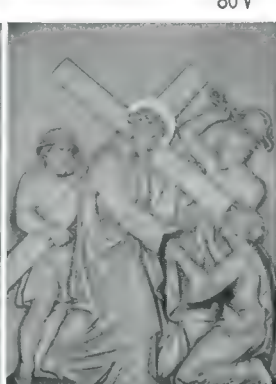
80V



80II



80IX



80VI



80III

公教会の聖堂には必ず「断罪」より「埋葬」に至る十四の場面(留)を表す十四面の絵(或は浮彫)が懸けられている。信者は各留の前で夫々定められた「十字架の道行の祈」を誦し或は黙想しつつ順次に移動する。ヴァンス礼拝堂のマティスの壁画も、その構成こそ新機軸であるが、十四の数と場面は伝統に従っている。





15	16	19	20	22	23	26
14	17	18		21	24	25
1	2	5	7	9	11	12
	3	4	6	8	10	13

82 《御受難》(《マエスタ》裏面) ドゥッチオ 1308~11.

1 《イエルサレム入城》 2 《弟子の足を洗う》 3 《聖晩餐》 4 《弟子達の論争》 5 《ユダの裏切》 6 《オリーブ山の祈り》 7 《就縛》 8 《ペトロの否み》 9 《アンナの前》 10 《カイファの前》 11 《打擲》 12 《ファリサイ人の誹謗》 13 《ピラトの尋問》 14 《ヘロデの前》 15 《ピラトの前》 16 《笞打ち》 17 《嘲弄》 18 《ピラト手を洗う》 19 《十字架を担う》 20 《ゴルゴダの丘》 21 《降架》 22 《埋葬》 23 《聖墓の三聖女》 24 《リンプスの基督》 25 《ノリメ タンゲレ》 26 《エマウスへの道》

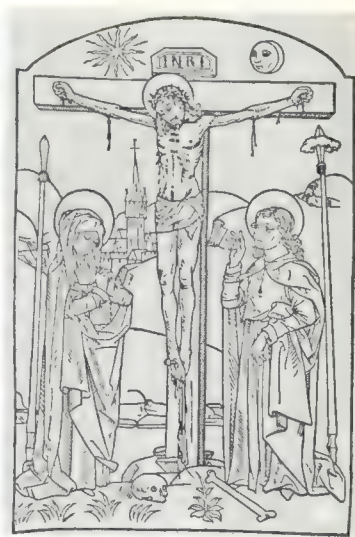




86 《降架》(聖母とニコデモ) フランス象牙彫刻 XIII. 87 《降架》 ベルリギエリ派 XIII. 88 《ピエタ》 フランス画派 1516. 89 《埋葬》 女王インゲボルクの詩篇挿絵 XIII.



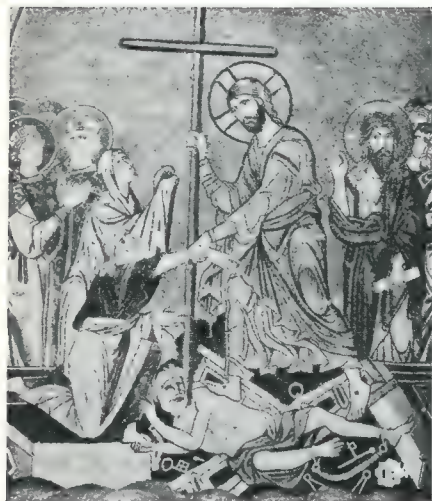
83 《十字架の下に聖母と聖ヨハネ》 フランス木版 XV. 84 《御衣を分つ》 アンテラミ 1178. 85 《槍突》 聖ボルレーダクス聖堂背面 ca.1110.



ゴルゴダの丘にイエズスは二人の罪人(一人は善き、一人は悪しき)と共に十字架に釘付けられた。兵卒達は主の衣を籤で分けた。イエズスはそこで聖母を愛弟子ヨハネに托した(ヨハネ一九ノ二五―二七)。正午からあたりは暗くなり三時に及んだ。太陽はくらみ、神殿の幕は二つに裂けた。イエズスは声高く「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と呼び、海綿に含ませた酢を受けてから「成り了れり」と云って息絶えた。一人の兵士が槍で脇を突いたので血と水とが流れた。日暮れてからアリマタヤのヨセフが主の屍をビラトから乞い得て、浄布に包み新しい墓に葬った。マグダラのマリヤやヨセフの母マリヤ、ニコデモや婦人達が香料と香油と没薬等を用意した(マテオ二七ノ三三―六〇、マルコ一五ノ二二―四七、ルカ二三ノ三三―五三、ヨハネ一九ノ一七―四二)。







90 《御復活》 ドイツ木彫 ca.1280. 91 《聖墓の三聖女》 イギリス詩篇挿絵 XIII. 92 《聖墓の基督》 フライブルク i. Br. 大聖堂 ca. 1340. 93 《御復活》 ドミティラ窟墓の石棺 IV. 94 《アナスタシス》(リンプスの基督) ダフニ僧院モザイク XI. 95 《聖母への御出現》 R.v.d. ウァイデン派 ca.1450.



さて安息日が終って一週<sup>はな</sup>の首の日の夜明にマグダラのマリヤ達が墓を見ようと来た時、折しも大きな地震があり、主の使が舞い下りて戦く婦人等に主の復活を告げた。復活の有様を聖書は直接には記さないが、美術では番兵の寝ている間に自ら蓋を上げて立ち現れる基督を描く<sup>93</sup>はその最も古い象徴的表現。マグダラのマリヤの知らせによってペトロとヨハネが駆けつけて墓の中に入ったが、布が置かれていたのみで柩は空だった。また聖書には記されていないが、復活後まず聖母の許に現れた基督も屢々描かれる。更に基督は復活に先立ってリンプス(古聖所)に降り、基督以前の善き霊達を救い出したという(ペトロ前書三ノ一九・二〇参照)。これまた復活の象徴として屢々美術に表現された(マテオ二八ノ一一、マルコ一六ノ一八、ルカ二四ノ一二、ヨハネ二〇ノ一〇)。







100 《不信のトマス》 聖ネクター  
聖堂柱頭 XII. 101 《エマウスの弟  
子》 レンブラント XVII. 102  
《不信のトマス》 ダフニ僧院モザイ  
ク XI.



めて二人は主を認めた。直ちにイエエルサレムに帰ってこの事を報告した（ルカ二四ノ一二—三五）。主が弟子達の許に現れた時トマだけが居なかつた。後に他の弟子がそれを告げた時、彼は「私はその手に釘の痕を見、指をその脇の傷に入れてみないうちは信じない」と云った。八日の後主は再び現れトマに向って「汝の手を私の脇に入れよ、信する者であれ」と云った。トマは初めて信じた。主は「汝は私を見てから信じたが、見ないで信する者は幸である」と云った（ヨハネ二〇ノ二四—三〇）。



96 《ノリメタンゲレ》 アンジュリ  
コ 1436. 97 《同上》 オタン聖堂彫刻  
XV. 98 《使徒に御復活を告げるマグ  
ダラのマリヤ》 女王インゲボルクの詩  
篇挿絵 XIII. 99 《エマウスへの道》  
同上.

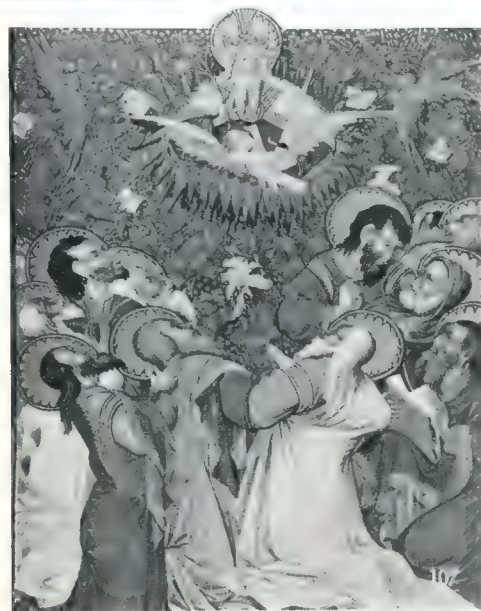


マグダラのマリヤが泣きながら墓の外に立っていると白衣の天使が二人主の屍の無くなった跡に降り「何故泣くのか」と聞いた。「我主が取り去られたから」と答えて振り向くとイエズスが立って居られたが、マリヤは園丁だと思い「若し貴方が取り去ったのなら何処に置いたのか教えて下さい」と云った。主が「マリヤよ」と云ったので彼女は師を認めた。イエズスは「我に触るな、私は未だ父の許に昇っていないから」と云って「弟子達に告げよ」と命じた。マリヤは直ちに弟子達に知らせたが彼等は半信半疑であった（ヨハネ二〇ノ一一—一八）。其後二人の弟子がエマウスという村に行く途次、イエズスが現れて道伴れになった。弟子達は主の復活の話をし乍らも目の前の伴れが主であることを悟らなかつた。家に入り食卓を共にした時イエズスがパンを祝して割って与えたので初





103 《ティベリアデ湖畔の御出現》 コンラート ウィツ 1444.  
104 《御昇天》 ボワティエ大聖堂  
絵ガラス XIII. 105 《聖墓の三  
聖女と御昇天》 ビュザンティウ  
ム象牙浮彫 ca.380. 106 《御昇  
天》 マインツ派福音抄挿絵 ca.  
1260. 107 《聖霊降臨》 ロアンの  
時禱書挿絵 XV.



主の昇天に関する福音書の記事は何れも頗る簡単である。ルカ  
(二四ノ五〇―五二)に依ればイエスは弟子達をベタニアに伴  
い手を上げて祝福しながら彼等を離れ天に上げられたと云う。  
(マルコ一六ノ一九、使徒行一ノ四―一参照)。  
其後、五旬節の日が来て皆が一緒に居る時突然天から激しい風  
の吹くような音が聞えて家中に満ち、火の様な舌の形したもの  
が現れて各自の上に留った。すると彼等はみな聖霊に満たされ  
その命ずるままに他国の言葉を語り始めた(使徒行二ノ一―四)。  
これはイエスが昇天に先だち弟子達に聖霊を遺すことを予言  
したことに依る(ルカ二四ノ四九、ヨハネ一四ノ二六、一五ノ二  
六、一六ノ七、使徒行一ノ五)。

その後ペトロ、トマ等七人がティベリアデ湖で一晩漁をして何  
もとれなかった夜明頃イエスはまた現れた。弟子達はそれを  
主であるとは知らなかった。イエスは「船の右の方に網を下  
せば漁れる」と云った。果して網を引き上げることもできない  
程の多くの魚が懸った。ヨハネが主を認めペトロはすぐ水に飛  
び込んだ。皆が陸に上ると炭火がありパンもあった。弟子達は  
既にそれが主であることを知ったので敢えて問う者はなかった。  
イエスは近づいてパンと魚とを彼等に与えた。これが弟子達  
への三度目の出現であった(ヨハネ二ノ一二―一四)。





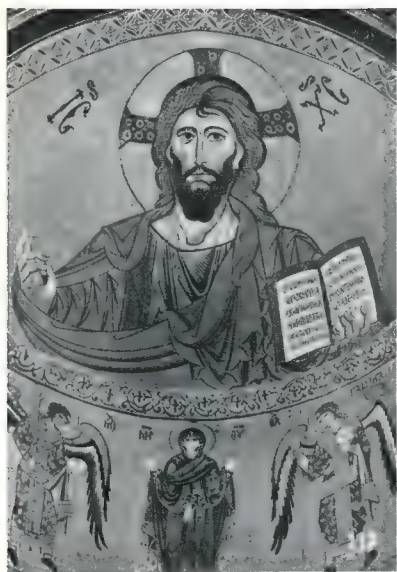
父と子と聖霊と(マテオ二八ノ一九、三ノ一六―一七、ヨハネ一書五ノ七参照)は三つの異ったペルソナ(位格)であるが、しかも唯一無二の一体である。神及び聖霊はもとより形なき霊であるが、美術では通常白髯の老翁と鳩の形で表される。

108 《公審判》 オタン大聖堂西正面破風浮彫 1130~40. 109 《同上》 女王インゲボルグの詩篇挿絵 XIII. 110 《救われたる霊を受取るアブラハム》 ランス大聖堂破風下浮彫 ca.1260. 111 《三位一体》 ティントレット XVI.

最後の審判の有様を基督は既に弟子達に語って置いた(マテオ二五ノ三一―四六、ヨハネ五ノ二五―三〇)。人の子がその栄光を以て諸々の天使を率いて来る時、その光榮の座に坐し、その前に万民を集め、牧者が羊と牡山羊を右と左に分つ様に、父に祝せられたる者を右に、呪われたる者を左に置くであらう。かくて隣人の飢えるのを見て食へさせ、渴くのをみて飲ませ、裸なる人に着せ、病んでゐる人を見舞い、牢に居る人を訪れた者は永遠の生命を得、然らざる者は永遠の刑罰に入るであらうと。裁くのはもとよりその死によって人類を贖った神人イエズス・キリストである。聖母と洗者ヨハネは傍に坐してとりなす。この光景はヨハネの黙示録(二〇ノ一―一五、一四ノ一四―二〇その他)に拠って様々に表現される。







112 《聖母子》ブリスキラ墓窟壁画 III. 113 《善き牧者》III. 114 《教える基督》IV. 115 《基督と二使徒》J. パススの石棺 ca.359. 116 《基督の頭文字》聖ドラランサンの石棺 IV.

117 《玉座の基督と二天使二聖者》聖ヴィターレ聖堂モザイク 521~34. 118 《基督と聖メナス》パウィットのイコン VI. 119 《全能者基督》チェファルウ聖堂モザイク ca.1148. 120 《ロマノス帝と妃エウドキアに戴冠する基督》象牙浮彫 944~49.



コンスタンティヌス大帝に依って基督教が公認され、公然と壮大な聖堂が建てられるようになると共に基督は勝利の基督、全能者として威厳に満ちた姿を現す。ビュザンティウム聖堂の内陣正面の高みには必ず雄渾な基督のモザイク像が信者を見下している。髪長く濃い髭の基督をはじめ様々な聖像の型が成立したのもこの期である。大彫刻はない。

基督教の初期の迫害時代には聖像の数も少く、其等は古代美術の形をそのまま借りてこれに基督教の意味を盛ったものだった。葡萄唐草はそのまま基督と信者（ヨハネ一五ノ一）を表し、羊を荷うヘルメスの像から善き牧者（ヨハネ一〇ノ一三）の像が作られた。子を抱く母の姿はその儘聖母となり又X P (CHR) の組合せをその儘基督とした。





ひたすらに主の栄光を讃えた  
ロマネスクの信仰はゴシック  
(十三、四世紀)に至って民衆  
の中に入り、建物も彫像も一  
層細く高く伸び、基督教その  
ものが威厳の宗教から愛の宗  
教に移って行くにつれて聖像  
も一層優雅に自然になって行  
く。一方では聖母は妖しいま  
でに美しくなり、一方では人  
の子の傷ましいまでの苦痛を  
露わに表現する。壁面は無く  
なり美しい焼絵硝子が生れる。



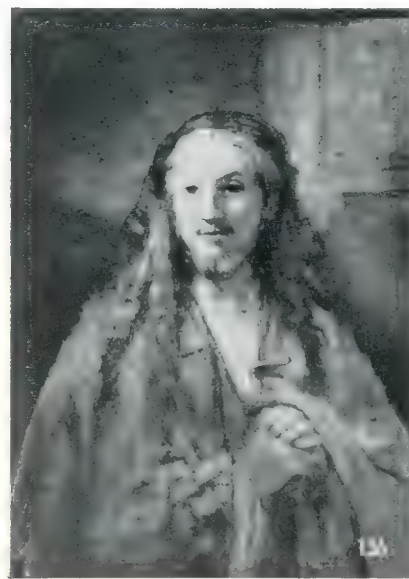
121 《荒野の試み》 聖マルタン・ド・ブランビエ  
聖堂 ca.1150. 122 《栄光の基督》 聖ジルド・  
モントワル聖堂 ca.1100~25. 123 《同上》 聖  
ジュニー・デ・フォンテーヌ聖堂 1020/21 124 《使  
徒に語る基督》 ライヒェナウ派福音抄挿絵 1007  
~14.

125 《美しき神》(祝福する基督) ランス大聖堂  
XIII. 126 《聖母戴冠》 フランス象牙彫刻 XIII.  
127 《聖母子》 フランス象牙彫刻 XIII. 128  
《磔刑》 グリュネワルト ca.1515.



カロリング朝の後十一、十二  
世紀のヨーロッパ、特に北伊  
仏、独等に盛行した新様式が  
ロマネスクと呼ばれる。モザ  
イクは壁画となり、聖堂の外  
面は彫刻で飾られる。  
その形体は抽象的で森厳神秘  
時として怪奇でさえあるが深  
い宗教的感情を漂わせている。  
これは先進文化から受継いだ  
在来の東方、西方両要素に更  
に北方の要素が加わって新し  
く生れた西欧様式である。





133 《悔悛する罪びとたちと基督》 ルーベンス ca.1620. 134 《茨の冠》(部分) グレコ 1600. 135 《基督の顔》 ルオー 1940~48. 136 《説教する基督》 レンブラント 1661.

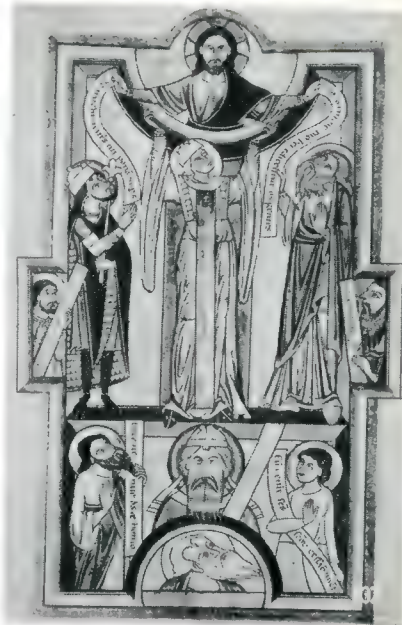
公教側の反宗教改革活動の盛んだった十七世紀には、イエズス会発生の地スペインにグレコ、ムリリオ、リベラ等、フランドルにはルーベンスなどの巨匠が出た。レンブラントは新教国オランダに在って唯一人儀軌に掬われない基督を描いた。以来今日に及ぶ基督教美術の中で真に深い宗教感情を表現し得たのは十九世紀のドラクロワと二十世紀のルオーであろうか。



129 《基督の洗礼》 ピエロ デラ フランチェスカ ca.1450. 130 《ピエタ》 ジョヴァンニ ベリーニ ca.1510. 131 《埋葬》 ティツィアーノ 1573~76. 132 《ピエタ》 ミケランジェロ 1498/9.

ルネサンスともなれば中世の象徴的、超絶的な表現は消え、新しい現実感に伴って宗教美術も全く新しい様相を示す。基督も聖母も人間として捉えられ、背景にも自然の実景が採入れられる。中には現世的な風俗図に墮するものもあるが、卓れた美術家は基督や聖母に最高の理想美を描き出すとした。苦悩や悲哀の表現も心理的に深く追求された。





137 《神の救済》 ヒルデスハイムのミサ典書挿絵 1150~75. 138 《天なる父》 トロワ聖堂祭壇頂部 1500~30. 139 《聖母戴冠》 ペラスケス 1641.

140 《天父にとりなす基督と聖母》 マコンの時禱書挿絵 XV. 141 《ケルビム》 チュファルウ聖堂モザイク ca.1150. 142 《セラフィム》 ペルジーノ XV. 143 《大天使ミカエル》 七宝イコン XII.

天なる父、即ち神はもとより形無く目にも見えない霊的存在である。神の御手とか御声とかいうのは比喻に過ぎない。然し美術では屢々白髯の老翁として描かれる。三位一体図はもとよりお告げや洗礼の図にも遙かな天上から祝福する様が描かれ、聖母の戴冠に基督と共に冠を手にする場合が多い。また時として天使の群に囲まれ天上の玉座に坐する姿で単独に描かれることもある。

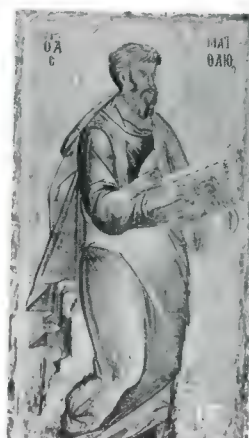
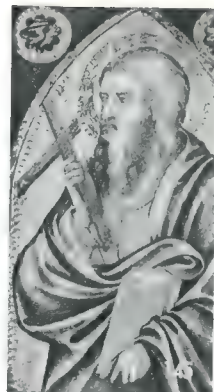
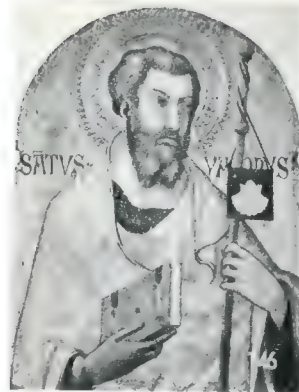
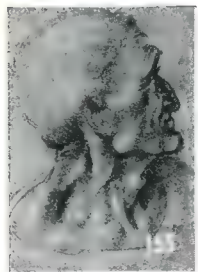
天使は厳密に云うと熾天使、智天使、座天使(138 140等の神の玉座を荷う天使)の上級、主天使、力天使、能天使の中級、權天使、



大天使、天使(普通)の下級の三級九段階に分れているが、最もよく描かれるのは最初の三種と最後の二種である。顔から四乃至六の羽が直接出ているのが本来の姿であるが、やがては人の背に両翼の生えた形が普通になる。大天使にはミカエルの他、お告げの天使ガブリエル、守護天使の長ラファエル、ヤコブと争ったバラキエル等七大天使がある。







144 《ゲオルギウスとペトロ》 ホーウエンワルトの福音抄挿絵 ca.1240. 145 《アンドレア》 ロレンツェッティ派 XIV. 146 《大ヤコボ》 S.マルティニ派 XIV. 147 《ヨハネの愛》 ドイツ木彫 ca.1320. 148 《フィリッポ》 アンドレア ブリオスコ(リッチオ) XVI. 149 《バルトロメオ》 ベルギーノ XV. 150 《トマ》 チェファルウ聖堂モザイク XII. 151 《マテオ》 オリドのイコン XIV. 152 《小ヤコボ》 聖フランチェスコの画家 XIII. 153 《タデオ》 S.マルティニ派 154 《シモン》 同上 155 《イスカリオテのユダ》 レオナルド ca.1495. 156 《基督と十二使徒》 聖ミトラの石棺 VI.

基督が多数の弟子達の中から選定した十二使徒は、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンドレア、ゼベデオの子ヤコボ(大)とその兄弟ヨハネ、フィリッポとバルトロメオ、トマと税吏のマテオ、アルフェオの子ヤコボ(小)とタデオ、熱心党のシモンと主を裏切ったイスカリオテのユダである(マテオ10ノ一四)。ユダの自殺後マテオが選ばれて十二人に加えられた(使徒行一ノ一五—二六)。タデオは又ユダとも呼ばれ、マテオはレヴィと同一人で、ヨハネと同じく福音書の記者である。直接の弟子ではないがパウロを始め、或地方に初めて福音を宣布した人(例えばザビエル)をも使徒と呼ぶ。



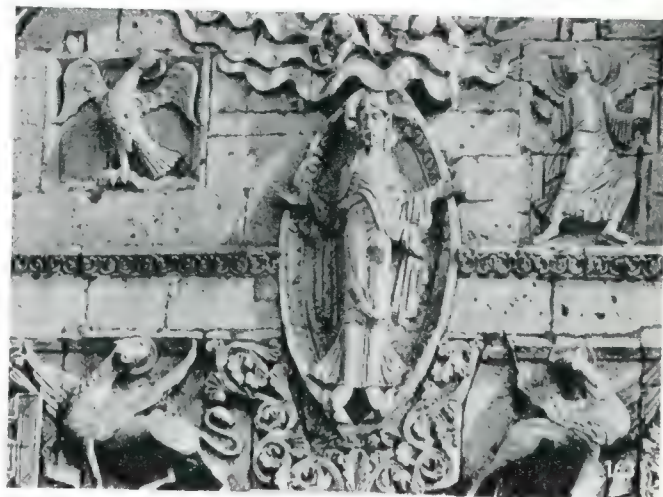


157 《マテオ》ザルツブルク派手写本挿絵 ca. 770. 158 《マテオ》シャルトル聖堂浮彫 ca. 1250. 159 《マルコ》ライヒェナウ派福音抄挿絵 ca. 1020. 160 《マルコ》ドルミティオ聖堂モザイク 1025~28. 161 《ルカ》フルダの福音抄挿絵 ca. 850~900. 162 《聖母を描くルカ》R. v. d. ウァイデン XV. 163 《基督と四福音記者の象徴》アングレーム聖堂浮彫 XII. 164 《ヨハネ》アダ派手写本挿絵 ca. 800. 165 《パトモスのヨハネ》メムリンク XV. 166 《ペトロ》聖ピエトロ イン ヴァティカノ V. 167 《パウロとその書簡を受ける人々》ドイツ手写本挿絵 1175~1200. 168 《パウロの回心》アーヒェン派手写本挿絵 ca. 1240.

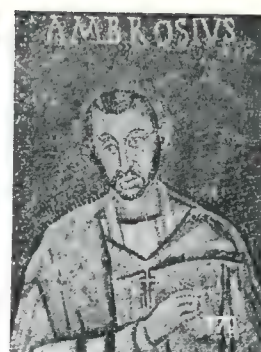


聖母を描く姿でも表される。福音書及び黙示録の著者で最も愛せられた弟子ヨハネは聖母と共に十字架の下に立ち(83)、聖晩餐の席で主に倚りかかり(65)、またパトモス島で幻想を見ながら黙示録を書く姿で、更に蛇の纏る聖盃と共に表される。ペトロは使徒の長で公会の祖であり、曾ての基督教迫害者サウロはダマスカスに向う途中突如回心して基督教宣布の第一人者パウロとなった。

四福音記者はヨハネの黙示録(四ノ六~一八)に依って夫々人の如きもの(後に天使の姿)、獅子の如きもの、犢の如きもの、鷲の如きものの形で象徴される。中世聖堂の一方の入口にはこの四つの象徴に取巻かれた栄光の基督が見出される。ルカは画家の祖として



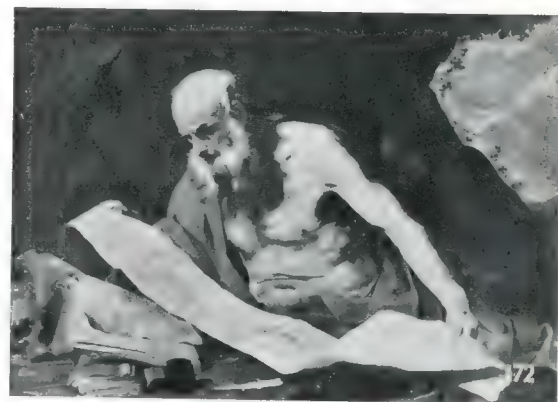




178 《コスマスとダミアス》  
アンジェリコ XV. 179 《ア  
ントニウス》 Giov. da ミラノ  
XIV. 180 《ドミニクス》ア  
ンジェリコ 181 《セバステ  
アス》 ソドマ XVI.

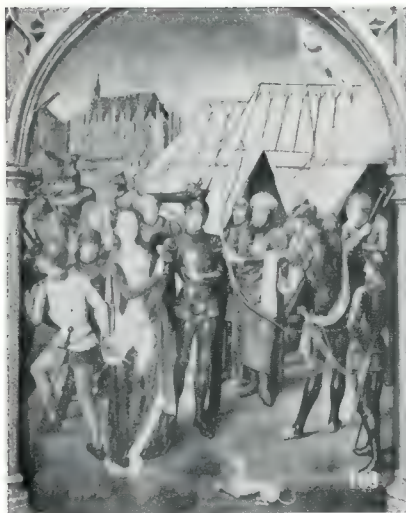


169 《アウグスティヌス》ボテ  
ィチェリ 1480. 170 《アン  
ブロジウス》 聖アンブロジオ  
聖堂モザイク V. 171 《グレ  
ゴリウス》 聖ソフィア聖堂モ  
ザイクXI. 172 《ヒエロニム  
ス》 リベラ XVII. 173 《フ  
ランチェスコ》 ベルリンギエ  
リ 1235. 174 《クリストフォ  
ロス》 マソリーノ派 XV. 175  
《ニコラウス》 ティツィアーノ  
1563. 176 《ゲオルギウス》  
P.d. フランチェスカ XV. 177  
《ロクス》 コスタ XVI.



公教会で公認された聖人の数は夥しいが、「神の国」の著者アウグスティヌス、聖書を翻訳したヒエロニムス等の四人は四大教父と呼ばれ、基督を背負うて河を渡ったクリストファロス、後にサンタクロースとして親しまれるバリのニコラウス、竜を殺して王女を救ったカパドキアのゲオルギウス(英国の国民聖人)、ベストの救難聖人ロクス、シシリアの医師出身の兄弟コスマスとダミアス、元軍人で矢で殉教したミラノのセバステアヌスは基督教守護の七聖人と呼ばれる。アジジのフランチェスコとスペイン出身のドミニクスは夫々の名に因む修道会の創立者であり、「荒野の星、修道士の父」と呼ばれる修院長アントニウスは悪魔の誘惑と闘ったので名高い。



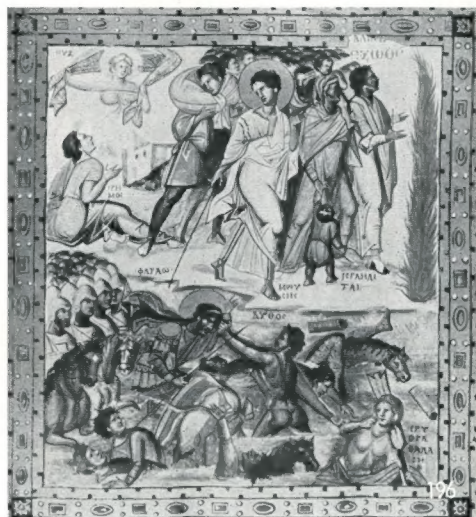


182 《カエキリア》(チェチリア) ラファエロ 1513. 183 《ルチア》 ジャコペロ デル フィオーレ XV. 184 《アガータ》 セバスティアノ デル ピオンボ 1520. 185 《アグネス》 リベラ 1641. 186 《マグダラのマリア》 マッダレーナの画家 XIII. 187 《アンティオキアのマルガリタ》 ジョーラモ ディ ベンヴェヌート XVI. 188 《ウルスラ》 メムリンク 1489. 189 《バルバラ》 ファン アイク 1437. 190 《アレクサンドリアのカタリナ》 マソリーノ XV.



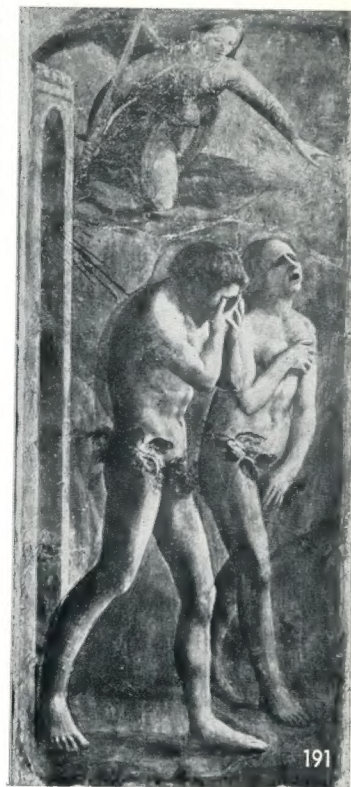
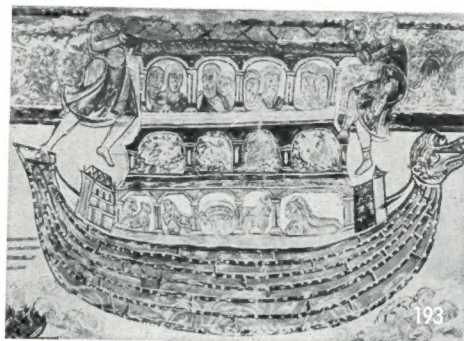
許婚と共に殉教(§ 30)したカエキリア(チェチリア)は音楽の、シラクサで殉教(§ 304)したルチアはナポリの、乳房を切取られた(§ 25)アガータは火難の、十三歳で殉教(§ 38)したアグネスは貞潔の保護聖女で四大殉教童貞聖女と呼ばれ、処刑(§ 30)前五十人の異教哲学者を論破したカタリナは哲学の、十万一千の侍女を回心させてフン族に殺された(IV世紀)ウルスラはケルンの、悪魔の竜を十字架で防いだマルガリタ(§ 25)は出産の、バルバラ(III世紀)は石工の保護聖女で教会守護の大聖女に数えられる。





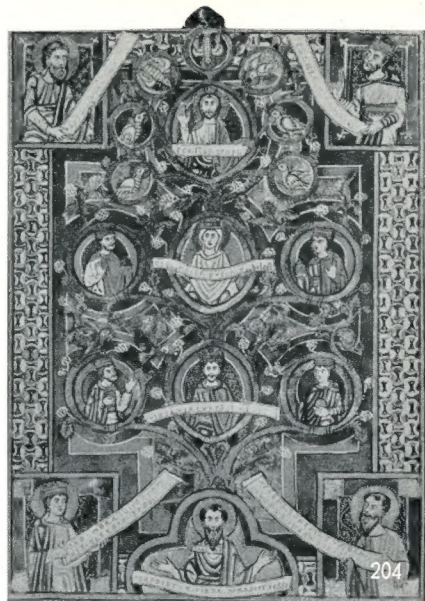
191 《樂園追放》 マサッチオ 1426/7. 192  
《アベルとカインの供物》 ムティエーサン-ジャン  
聖堂柱頭 1100~50. 193 《ノアの方舟》  
聖サヴァン聖堂壁画 XII. 194 《アブラハムの  
燔祭》 ブルネレスキ 1401. 195 《ヤコブ  
の祝福》 レンブラント 1656. 196 《紅海を  
渡る》 ギリシア語詩篇挿絵 X. 197 《天の  
マナ》 聖マルコ聖堂モザイク XIII. 198 《シ  
ナイ山で律法を授かるモーゼ及びイスラエルの  
民にモーゼの律法を誦するヨスエ》 グラン  
ヴァルの聖書挿絵 ca.840.

(創二〇—五〇)はイスラエル民族の祖  
として崇められ、そのイスラエルの民  
がエジプトに於て奴隷となり、モーゼ  
を頭としてエジプトを脱し紅海を渡り  
(一三、一四)天のマナを受け(一五、  
一六、聖体の前表)、やがてモーゼが  
シナイの山で天主より律法の書を賜る  
(二〇以下)等の物語は出埃及記に詳し  
く語られている。モーゼの死後、その  
嗣ヨスエがヨルダン河を渡ってイエ  
リコを占領し、モーゼの律法を誦し、  
イスラエル民族に土地を分け与える等  
の物語はヨスエ記にある。



基督降誕前の千余年の歳月に亘って書  
かれた旧約は歴史と教訓と予言とから  
成っているが、旧約は凡て新約の前表  
であり、新約はすべて旧約の実現であ  
るとされる。この旧約と新約との和合  
(コンコルダンス)は凡ゆる細部に亘  
って説かれるが、美術では最初の二歴史  
書創世記、出埃及記)や王達の記録な  
ど、さらにルト、トビト、ユディト、  
エステルなどの書の物語や予言者の姿、  
天地人類の創造(創一、二)、人祖の原  
罪(創三)、アベルとカイン(創四)、ノ  
アの物語(創六以下)等が多く描かれる。  
アブラハム(創一一以下、一子イザク  
のことは二一、二二)、その子ヤコブ





大魚に吞まれて助かったヨナの事蹟は御復活の前表、巨人ゴリアテを倒し、羊飼から王となったダヴィドは基督の祖、単身敵將の首をとったエディトはイエルサレムの教主とされる。かくてダヴィドから基督に至る系図はイエッセの樹として表され、イザヤ、エレミヤ、ダニエル、エゼキエルの四大予言者は四福音記者の前表とされる。旧約の予言の通り基督は受苦して救主となった。黙示録(五)の神の羔は基督そのものとして礼拝され、その聖痕より垂れる血潮をエレクシア(教会)が受ける。

199 《ヨナ》 ティントレット XVI. 200 《堅琴を弾くダヴィド》 ギリシア語詩篇屏絵 IX. 201 《獅子窟のダニエル》 聖ジュスヴィエーヴ聖堂柱頭 XI. 202 《天の父と旧約の予言者、巫女》(人物は左からイザヤ、モイゼ、ダニエル、ダヴィド、エレミヤ、ソロモン及びエリユトリア、ベルシア、クマ、リュビヤ、ティブルティナ、デルフォイの巫女) ベルギーノ XV. 203 《ユディト》 フローリ ca.1610. 204 《イエッセの樹》 ヘルマンズハウゼンの福音抄挿絵 XII. 205 《四福音記者を荷う四予言者》 ベーエルヌ聖堂柱頭 XI. 206 《受難の諸表号》 フランス手写本挿絵 XV. 207 《神の羔》 フルダの手写本挿絵 IX.



## 収録作例一覧

### 初期基督教時代

カタコムバ壁画 112.

彫刻 30, 93, 113, 114, 115, 116, 156, 166.

### ビュザンティウム

モザイク 4, 5, 7, 16, 26, 40, 41, 45, 49, 70, 71, 94, 102, 117, 119, 141, 150, 160, 170, 171, 197.

イコン 10, 55, 118, 143, 151.

象牙彫刻 13, 105, 120.

### ロマネスク

彫刻 46, 65, 84, 85, 100, 108, 121, 123, 163, 192, 201, 205.

絵画 122, 193.

### ゴシック

焼絵硝子 (Stained glass) 3, 104.

彫刻 76, 77, 78, 86, 90, 92, 97, 110, 125, 126, 127, 138, 147, 158.

作者不詳絵画 31, 50, 68, 83, 88, 152, 186, 208.

### 中世手写本挿絵 (Miniatures)

6, 14, 18, 22, 25, 34, 37, 38, 44, 47, 57, 60, 66, 67, 79, 89, 91, 98, 99, 106, 107, 109, 124, 137, 140, 144, 157, 159, 161, 164, 167, 168, 196, 198, 200, 204, 206, 207.

ファンアイク Jan van Eyck (ca.1390~1441) 189.

ウィツ Konrad Witz (ca.1400~46) 103.

ウアイデン Rogier van der Weyden (ca.1400~64) 12, 95, 162.

ムリンク Hans Memling, Memling (1430/40~94) 165, 188.

グリューネワルト Grünewald, Matthias Gothardt (ca.1470~1528) 128.

デューラー Albrecht Dürer (1471~1528) 73.

オルレイ Bernaert van Orley (ca.1492~1542) 51.

フロマン Nicolas Fromant († 1484) 62.

アンテラミ Benedetto Antelami (XII 後半) 84.

ベルリンギェリ Berlinghieri (ca.1190~ca.1243) 87, 173.

ジョヴァンニ ピサノ Giovanni Pisano (ca.1250~ca.1314) 9.

ドゥッチオ Duccio di Buoninsegna († 1319) 27, 72, 82.

ジョットー Giotto di Bondone (1266~1337) 8, 35, 59, 64, 75.

ロレンツェッティ Pietro Lorenzetti (ca.1280~ca.1348) 145.

マルティニ Simone Martini (1284~1344) 146, 153, 154.

Giov. da ミラノ Giovanni da Mirano, Johannes Jacobi (ca.1300~p. 1365) 179.

バルナダ シェナ Barna da Siena (1350~70 活動) 69.

### ルネサンス

ジャコペロ d. F. Jacobello del Fiore († 1439) 183.

ギベルティ Lorenzo Ghiberti (1378~1455) 24, 56, 74.

マサッチョ Masaccio, Tommaso di Ser Giovanni (1401~28) 54, 191.

マソリーノ Masolino da Panicale (1383~1447) 174, 190.

ブルネレスキ Filippo Brunelleschi (1377~1446) 194.

アンジェリコ Beato Angelico, Fra Giovanni da Fiesole (1387~1455) 11, 21, 96, 178, 180.

フランチェスカ Piero della Francesca (ca.1416~92) 129, 176.

ペリーニ Giovanni Bellini (1430~1516) 130.

ヴェロッキオ Verrochio Andrea del (1436~88) 42.

ボティチェリ Botticelli, Sandro di Filipeppi (1444/5~1510) 169.

ピントリッキオ Il Pintoricchio, Bernardino di Betto di Biagio (1454~1513) 19.

レオナルド Leonardo da Vinci (1452~1519) 表紙, 15, 155.

ペルジーノ Il Perugino, Pietro Vannucci (ca.1450~1523) 39, 142, 149, 202.

コスタ Lorenzo Costa (ca.1460~1530) 177.

ベネデット ベンボ Benedetto Bembo (ca.1460~65 活動) 23.

ジローラモ d. B. Girolamo di Benvenuto (1470~1524) 187.

A. ブリオスコ Andrea Briosco, Bregno, Riccio (1470~1532) 148.

バサイティ Jacopo Basaiti (ca.1470~ca.1530) 29.

カタナ Vincenzo di Biagio Catena (ca.1470~ca.1531) 32.

ソドマ Il Sodoma, Giovanni Antonio de' Bazzi (1477~1549) 181.

ラファエロ Raffaello Santi (1483~1520) 2, 23, 182.

セバスティアノ d. P. Sebastiano del Piombo (ca.1485~1547) 184.

ミケランジェロ Michelangelo Buonarroti (1475~1564) 132.

ティツィアーノ Tiziano Vecellio (ca.1480/90~1576) 61, 131, 175.

ティントレット Il Tintoretto, Iacopo Robusti (1518~94) 111, 199.

### 17 世紀

カラヴァッジョ Caravaggio, Michelangelo Merisi (1565~1609) 28.

アローリ Cristofano Allori (1577~1621) 203.

グレコ El Greco, Domenikos Theotokopoulos (ca. 1541~1614) 58, 134.

リベラ José de Ribera, Lo Spagnoletto (1588~1652) 172, 185.

ベラスケス Diego de Silva y Velazquez (1599~1660) 139.

ムリヨ Bartolomé Esteban Murillo (1610~82) 43.

ルーベンス Peter Paul Rubens (1577~1640) 133.

レンブラント Rembrandt van Rijn (1606~69) 17, 36, 53, 101, 136, 195.

フェルメール Jan Vermeer van Delft (1632~75) 63.

G. d. ラトゥール George de Latour (1593~1652) 20.

プサン Nicolas Poussin (1593~1665) 48.

### 18~20 世紀

ブレイク William Blake (1757~1827) 52.

マティス Henri Matisse (1869~1954) 81.

ルオー Georges Rouault (1871~1958) 135.







1 《聖晚餐》 レオナルド 1495～98

